

主（おも）に重荷（おも）はありません

奨励	足立 麻子〔あだち・あさこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団丹波新生教会牧師

ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します。もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役に立たない方になります。割礼を受ける人すべてに、もう一度ははっきり言います。そういう人は律法全体を行う義務があるのです。律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。わたしたちは、義とされた者の希望が実現することを、`霊、により、信仰に基づいて切に待ち望んでいるのです。キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。

あなたがたは、よく走っていました。それなのに、いついだれが邪魔をして真理に従わないようにさせたのですか。このような誘いは、あなたがたを召し出しておられる方からのものではありません。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。あなたがたが決して別な考えを持つことはない、わたしは主をよりどころとしてあなたがたを信頼しています。あなたがたを感わするは、だれであろうと、裁きを受けます。兄弟たち、このわたしが、今なお割礼を宣べ伝えているとするならば、今なお迫害を受けているのは、なぜですか。そのようなことを宣べ伝えれば、十字架のつまずきもなくなっていたことでしょう。あなたがたをかき乱す者たちは、いっそのこと自ら去勢してしまえばよい。

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。だが、互いにかみ合い、共食しているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

(ガラテヤの信徒への手紙 5章2―15節)

恩師との出会い

私の両親は共にクリスチャンではなく、家族や親戚、周りの友人にもキリスト教や教会と関係のある人はいませんでした。という話をすると必ず、「どうしてまたクリスチャンになったのですか、牧師になったのですか」と尋ねられます。教会に一人で住み込み、昼夜問わず、益暮れ正月関係なく働き、日曜日は当然休めない、ここ10年以上、父親の法事にも出られないような娘の姿を見て、しばしば郷里から遊びに来る私の母は、なんと不自由でしんどい道を選んだのだ、と憐れに思っているようです。今でも、私が牧師を続けることに心から賛成しているわけではありません。私は母親に「重荷を背負って不自由だ」と思われているのです。しかし、私は聖書の御言葉とキリスト・イエス、そして教会の交わりを知った時に初めて、これまでの自分がいかに重荷を背負ってきたか、ということに気付いたのです。かつての私は、自分にも人にも優しくできず、傷つけては逃げることしかできない人間でした。正しいことが何なのか答える場所もない。私にとって、キリストを知らずに生きてきた時間こそが、重荷を背負った不自由な状態だったのです。

同志社大学に編入する以前に私が通っていた大学は、愛媛県にあるキリスト教主義の女子大学でした。カトリックの修道院が母体の高校を卒業していましたから、もちろん聖書は読んだこともありましたが、福音書の内容くらいは知っていました。しかし、聖書を読むだけでは「この道を行こう」とまでは思いませんでした。神さまを信じていなかった私が洗礼を受けて牧師になったのは、その大学で一人の教師に出会ったことがきっかけでした。私が「恩師」と呼ぶのは、今までもこれからもその先生ただ一人です。先生は私を自分の子どものように大切にしてくださいました。先生のご家族のお誕生日会に招いてくださったり、私の誕生日にもお連れ合いと一緒に祝いでくださったりしたこともありましたが、私が同志社大学の神学部を受験するとき、必要な語学や神学を教えてくださいただけでなく、当時経済的に苦しかった私のために受験費用を出してくださいましたのも先生でした。

22歳の時に「私も先生のようにキリスト者になりたいのですが、何か必要なことはありますか。もっと聖書を読んだ方がいいですか。教会の奉仕を頑張った方がいいですか」と質問したときに、先生はこう答えてくださいました。「そんなに難しく考えることはありません。ただ、何かをするとき、『イエスさまがここにおられたらどうされるか』を一番に考えるようになればいいのです」。思い返してみると、大学の講義以外で先生からそれらしい聖書の言葉やキリスト教についての教えは受けたことがありません。また、教会に行くように勧められたこともありません。ただ、ご自身の行いをもって、私たち学生にキリストの道を示しておられただけでした。それもごく自然に。先生のように生きたい、先生が見つめておられるイエスさまを私も見つめたいと思いました。私は先生とおして、イエスさまの愛を知ったのです。次は、私がこの命をおしてイエスさまの愛を伝えることができたならどんなに素晴らしいか、と思いついたのです。とは言え現実の私は、未熟で欠けの多い人間です。誰かを信仰的に導くなど大層なことはできません。感情に振り回されたり、失敗して泣いたり怒ったり、落ち込んだりします。時には大切な人の信用を失ってしまうこともあります。本当に多くの人に迷惑をかけてばかりです。それでも、この道が辛いとか重荷であるとは考えたことはありません。キリスト者になり牧師にならなければ得られなかった恵みの多さに感謝せずにはいられないのです。

イエスさまの愛を知ること、これまで自分が愛だと思っていたものがすべて打ち砕かれるということです。同時に、これまで背負ってきたあらゆる重荷を下ろして生きられるということなのです。人に好かれようとして無理をしなくてもいい、周りのペースに合わせて早足にならなくてもいい。どうすれば愛してもらえるのかと迷わなくてもいい。イエスさまが私のお手本となってくださるから、それに従えば自然と神さまが自分に何を期待しておられるのかが分かるのです。

「愛の教え」を背負う

しかし、イエスさまの愛を知った、神さまを知った、というだけでは信仰は養われません。キリストと共に生きることを始めなければならぬのです。私たちがこの世で背負う重荷は、イエスさまが十字架と一緒に共に背負ってくださいました。そのイエスさまのために、私たちが負わなければならないのは、愛の教えです。一つ、「互いに愛し合いなさい」。人の思いによる好き嫌いに縛られず、イエスさまが私を愛されたように他人を愛すること。二つ、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、人にもしなさい」。それももちろん、自分勝手に一方的なやり方ではなく、相手の心を心底思っ、その人のためになること、喜ぶことをするのです。また、自分がされて不愉快なことは相手にもしてはならない。この教えを誰もが強い心で貫くならば、あらゆる暴力・差別を私たちの世界から退けることができ、神さまの御心に適う生き方に繋がります。イエスさまのように自分の命を賭けて人を愛することは、難しいと思います。相手を守るために自分が傷つくこともあります、その逆もあるでしょう。キリストの愛を追い求めることは、人間に与えられた永久の課題です。しかし、諦めてはいけません。その愛を追い求める人は身も心も自由になります。人の目や評価を気にして縮こまらなくてもいいし、周りの意見にいちいち左右されずにいられるのです。私たちの行くべき方向を決めるのは、他の誰でもなく神さまであり、イエスさまの愛の教えだからです。イエスさまが私たちの首にかける轡（くびき）は負いやすく、荷物は軽いというのは真実です。

信仰は重荷か

牧師として働くなかで、たびたびこのような相談を受けます。長く教会に通って神さまを信じているものの、洗礼には踏み切れない。なぜかと尋ねると、信仰をもつ、ということ自体が重荷になってしまうのではないかと問われます。また、別の人からは他教会から籍を移すかどうかを迷っているという相談もあります。理由を聞くと、自分の信仰がどうというよりも、教会のメンバーとして奉仕をしたり、献金をしたり、集会に参加したりということが重荷のように感じるのだと言いました。それならばこのまま「お客さん」でいたい。その気持ちは分かります。私も長い間、離れている母教会から京都の教会に籍を移す時には、そう思ったことはありません。面倒な責任はいらない、ただ礼拝だけ守られたらそれでいいという甘えでした。

しかし、今ははっきりと分かります。イエスさまの愛が、目を追うごとに私たちをあらゆるしがらみから自由にするのです。ただ教会に通って、聖書を読んでいるだけでは、神さまとイエスさまを本当に知ったことにはなりません。信仰が重荷になるかどうかは、主の招きに応じてみなければ分からないことです。礼拝を守ること、奉仕をすること、献金を捧げることは、単なる「信徒の義務」ではなく、イエスさまの愛に動かされているからできるようになると気付くのです。そして、他人に対しても「イエスさまならこうするだろう」と思うことを自然に行えるようになります。イエスさまがなされることは、神さまが喜ばれることです。それらを私一人ではなく、同じ思いの仲間と一緒に。それが、「キリスト者になる」ということです。なんの重荷もありません。ただ、お互いに大事にしたいことはあります。自分が今できることを、心から喜んで行う、捧げるということです。他の人に対して、自分と同じように、みんなと同じようにと強いることは、それこそ重荷になってしまいます。かといって「私はやりたいことをやりたいときにやるのだ」というと、仲間割れしてしまいます。それはイエスさまの御心ではありません。しかし、そういう時こそ立ち帰るべきは、イエスさまの言葉です。「人にしてもらいたいと思うことは、人にしなさい」「互いに愛し合いなさい」。私たちが背負うのは、この教えのみです。キリスト者は、この世のあらゆる重荷から自由にされているのですから、他人に対しても、キリスト者以外の人にも重荷を背負わせることはしません。むしろ、重荷を負っている人がいればその荷物と一緒に持ってあげるべきです。イエスさまはご自分を救い主だと受け入れた人だけ愛されたのではなく、疑う人、迷う人のことを探しに行き、重荷を背負ってあげようとして手を差し伸べられる方です。その手はいつも、すべての人の目の前にあります。